一面に麦畑が広がる川間村／昭和31年5月／写真は民俗学者の宮本常一が撮影／写真提供＝周防大島文化交流センター

昭和40年代後半の米余りによる生産調整と米価の低迷は、農家の勤労意欲に大きな影響を与え、同時に農村では兼業化や、高齢化のため、従来の地域農業が根底から揺らぎ始め、それを立て直すために、農作業の高度化と経営状況の改善が重要課題となったのです。

農業をとりまく厳しい環境

土地改良事業や農業基盤整備事業は着実な成果をもたらしましたが、昭和40年代に本格的な高度経済成長を迎えると、食生活の洋風化や多様化などにより、米離れが進み、同45（1970）年には慢性的な米余りとなりました。

このような背景の中、農業から流出した労働力は、製造業やサービス業へと移り、農村地帯では後継者不足や担い手の高齢化が進み、農家では経営規模の縮小化や、耕作放棄地が増えるなど、都市化の波がこれまでの農業のスタイルを大きく変えつつありました。

田植え作業／昭和32年5月・目吹／写真提供＝鎌形寿夫さん

畑一面の川間大根／昭和43年10月・川間／写真提供＝鎌形寿夫さん

農地の大規模化と高度利用

米余りに起因する生産調整や米価の低迷などの問題は、農家の生産意欲を減退させ生産力の低下をもたらしました。

農業経営と食糧供給を安定させるためには、担い手不足の解消、遊休農地の有効利用、農地利用の高度化や、農業経営の近代化も重要な課題でした。

そこで市は昭和48（1973）年、農業振興計画に基づく地域指定を行いました。優良農用地の宅地などへの転用を防ぎ、基盤整備事業などにより、農地の生産性をさら